

2021 年度 G T セミナー 第 55 回 保育環境セミナー 空間的環境編 前編②

第 224 号 2021 年 6 月 14 日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カガヤ 奥山卓矢

空間的環境編 前編②

2021 年 5 月 29 日に第 55 回保育環境セミナーを
新宿せいが子ども園にて開催しました。

全国から約 100 施設を超えるお申し込みを頂きました。
また、Zoom での視聴者を加えると 400 名を超える先生方と
一緒に学ぶセミナーとなりました。

【セミナー開催趣旨】

乳幼児教育は、その時期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることが基本です。たとえば、赤ちゃんにハイハイをさせようと思ったら、その手順を教えるのではなく、自分から移動したいという動機（欲しい「もの」が前方にあるとか、抱かれない「ひと」が少し先にいるとか）を持たせ、そこまで行くための距離「くうかん」が必要になってくるのです。そこには、もの、ひと、場（空間）が関わってくるのです。そのために保育者は、乳幼児の主体的な活動を促し、乳幼児期にふさわしい生活が展開されるように、子どもが自発的、意欲的に関われるように、物的・空間的環境を構成しなければなりません。

そこで子どもは、それまでの体験を基にして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身に付け、新たな能力を獲得し、心身を発達させていくのです。今年の環境セミナーでは、「くうかん」「もの」「ひと」という環境について具体例を通して基本から学んでいきます。

ギビングツリー代表 藤森平司（新宿せいが子ども園 園長）



【前回までのあらすじ】

保育所保育指針、幼稚園施設整備指針の内容から、保育室における空間の意味について考え方をお話頂きました。今回は、各年齢の保育室におけるポイントなどを新宿製がこども園の保育室を通して藤森代表に考え方を示して頂いています。

—0歳の保育室—

遊びのゾーン

次第に、子どもたちは、寝返りをし、ハイハイをし始め、伝い歩きをし始めます。そのうちに、動きが活発になり、部屋の中を走り始めます。また、ある子は、集中しておもちゃで遊ぶようになります。この頃の発達は、同じ0歳児のクラスでも、個人によって随分と違ってきます。ですから、走り回るようになると、1歳児の遊びのゾーンに移っていきます。寝返りをしている子の回りを、ぐるぐる回っている子がいるというのは、いくら同じクラスだからといって、同じ空間で過ごさせるのはおかしいのです。十分にハイハイや寝返りを打てるようにするために部屋にはあまりいろいろなものは置きません。そのために、床は畳になっています。まだ、寝返り、ハイハイの時期には、赤ちゃんの周りに散らばせておいて、それを取ろうとする意欲を持たせます。また、おもちゃの棚は置いてあるものが赤ちゃんの視線の先に見えるように並べておきます。

食事のゾーン

食事するときには、保育者はどのくらい子どもを援助すればよいかを子どもの発達によって考えます。そして、その援助は、子どもが意欲を持って、自分で食べようとするように援助していかなければならないのです。ですから、食事を楽しい雰囲気の中で食べることができるよう環境を工夫し、同時に人としての環境を考えます。それは、子どもを援助する保育者のかかわり度合いです。0歳児の保育士配置基準が、国では3対1と決められています。しかし、授乳期では、1対1で対応をしなければなりません。3対1といっても平均ですので、0歳児は全員3対1で職員が対応するのではないのです。保育者の援助が、3対1くらいでちょうどよい子は、そのグループで食事します。そのグループを構成するのは、発達の連続性を重視し、生年月日で分けけた集団ではありません。この3対1で対応するというのは、こんな効果があります。3対1で子どもに食べさせると、保育者がある子の口に食べ物を入れてあげて、次の子にあげて、次の子にあげてもう一度この子にあげます。その間に、保育者も自分でも食べます。すると、一度口の中に食べ物を入れてもらった後、次にもらえるのには少し間があります。そこで、思わず手づかみをして、自分で食べようとします。フォークなどを使って自分で食べることができるようになると、4対1くらいの対応に移行していきます。それは、1歳児と次第に混ざってくることになるのです。また、自分で食べようとし始めた時に、食べるモデルが必要になります。ですから、保育者はできるだけ子どもと一緒に食べます。その関わり方が重要なのです。手づかみをはじめると、手だけではなく、机の上や床がぐちゃぐちゃになってひどくなります。床が汚れるのを家庭では嫌がります。園でも、そのためにシートを敷いたり、新聞紙の上で食べさせる園を多く見かけます。しかし、仕方ないとしても、楽しく食べるための環境としては適当ではありません。十分と自ら食べることがで

き、また、こぼれたものの上を子どもが歩かないように、ハイチェアで食べます。それから自分で食べるためには椅子の高さと足の位置と座板の出の長さの3つの調整が必要です。そのようなイスを用意します。

昼寝ゾーン

昼寝は、寝る時刻や、寝ている時間が月齢や個人によってかなり差があります。それを、年齢によって、みんな等しく寝かせようとしてします。また、昼寝の場所の問題もあります。最近では、昼寝というのは昼間に眠るので暗くするべきではないという考え方ができました。あまり暗くすると夜と勘違いしてしまうというのです。少し明るくて少しうるさい中で寝る。そして、夜は暗くして寝るといことがよいという考えです。乳児は、まだ小さいうちは午前中に寝ることも多いので、ベッドサークルの中で、保育者の手元で寝ますが、次第に、午後寝ようになり、寝る時間も一定になってくると、今度は床で寝ます。この頃は、1歳児と一緒に寝るようになっていきます。

寝・食・遊のゾーン分け

寝、食、遊のゾーンを分けるのは、それぞれの活動を十分に保障してあげるためです。遊んでいる途中で、食事に時間になると、その場所で食事をするとなると、一斉にこどもたちの遊びを中断してしまわなければなりません。食事をしている場所で次に昼寝をしなければならぬと、食べるのを一斉に中断するか、食べている隣で布団を敷き始めなければなりません。まだまだ、乳幼児は、食べる時間、寝る時間には個人差があります。はじめのうちは、自分で納得いく活動がある程度保障してあげることが、次第に次第に時間内に食べたりすることができるようになるのです。しかし、日本では、なかなかそれぞれのスペースを確保することが難しい園が多いようです。その時には、空間を兼用しなければなりません、少なくとも次に行う活動を、それまで行っていた空間と違うところで行う工夫が必要です。

—1歳児の保育室—

遊びのゾーン

この空間は、大きく二つの空間に分けます。一つは、集中するゾーンです。座り込んで何かをすることを保障する空間です。そこには、子どもが座って取り組むおもちゃが棚に置いてあります。この年齢の部屋の棚は、0歳児の置いてあるものが見える棚ではなく、中に入っているものの写真が貼ってあります。実物を見るよりも、少し抽象化してきます。もうひとつは、動きのゾーンです。十分と体を使って遊ぶゾーンです。もちろん、それぞれのゾーンは、1歳児のためではなく、その空間が必要な子どものためのものであるので、走り回る0歳児もこの場に來ます。そして、隅のほうに、絵本コーナーがちょっと独立します。これは、落ち着いて本を読みたい子を保障するために別の空間を作ります。

食事ゾーン

この空間は、0歳児の食事の空間から連続してあります。まずは、保育者の援助する配置数です。6対1、8対1と順にかかわりが減ってくるような環境を用意します。こ配置基準の変わり目が、普通は年度末から年度初めに行われることが多いのですが、それは、非常におかしなことです。一晩寝れば、子どもが前日の倍だけ自分でできるようになるわけがないのです。ですから一年かけて順に先生との距離が開いていきます。また、少しずつ遊び込む時間が変わってくることから、食べ始める時刻がずれていくことができるように配置されていきます。この頃になると、背の低いテーブルに、背の低いいすに座って食べるようになります。椅子は3段に高さが調節できるものを用意します。また、牛乳パックなどを足元と背中において、子どもの足が床にきちんとつくように調節しますし、背板までの距離

を調整します。子ども一人ひとりに合わせて調節してありますので、座るいすは子どもによって決められています。ですから、それぞれの子どもの顔写真が背もたれに貼ってあります。ここでも、0歳と1歳というわけ方ではなくてその子がどのくらい自分で食べられるかということを連続してみていくような環境を用意しなければいけないのです。

昼寝ゾーン

0歳児から連続して用意をしていきます。また、空気のよどみを作らないように、奥まった薄暗い空間の場合は、換気を良くしたり、空気を攪拌する工夫が必要です。

—2歳児の保育室—

遊びのゾーン

2歳児になると、次第に社会性が育ってきます。みんなで行動することが楽しくなります。それにつれて、待つことや、我慢をすることなど色々なルールを知っていきます。それは、決して、自分の行動を制約するものではなく、よりよく生きるために必要であることを知っていきます。そんなことを知っていくための環境構成が必要になってくるのです。まず、お集まりをする場所は、円形のじゅうたんを使います。集団意識ができてくるころなので、お集まりだけでなく、子どもが集まるときには、できるだけ円形で集合させます。そうすると全員の顔をお互いに見ることが出来ます。遊びも一人遊びからつなげて遊ぶようになります。集団の楽しさを知らせる場所になります。ままごとの場では、次第に役割分担をし始めます。お父さんと子ども役とかレストランとお客さんとか、子ども集団で遊ぶようになります。床で電車を作って遊ぶときにも、隣の子と線路をつなげて長くしたり、家と電車で町を作ったりと、みんなで作ることのダイナミックさを感じるような場を提供していきます。それから髓筋を促す手先をつかう場所を用意します。はさみとかのりとかパズルなどで遊ぶ場です。ここも、大きな丸いテーブルで、数人で丸くなって遊べます。皆で集まる楽しさを2歳のころから教え始めるのです。また、おもちゃをしまう棚が、1歳児から少し進化します。2歳になると前扉に貼ってあるのが、写真からイラストに変わります。具体物から写真、写真からイラストへ段々抽象化していき、3～5歳児になると文字だけになっていきます。文字というものは中身をあらわしているということと、形を抽象化したものが文字だということを環境から感じさせていきます。それが、文字指導の基礎のひとつなのです。

食事ゾーン

2歳児は集団を意識させるということなので、皆で丸くなって食べます。次第に子どもは社会が広がっていきます。丸くなるのは、みんなで食べる楽しさを知るだけでなく、他の子が食べるのを見るということも重要です。また、この2歳児が食べるところから3～5歳児が食べているのを見ることが出来ます。見て学ぶという場所になっています。

昼寝ゾーン（着脱・排泄の自立）

自分で、着脱をすることができ、排泄の自立ができてくる頃なので、それができるような環境にしておきます。

—3・4・5歳児の保育室—

ゾーンの作り方の留意点

3, 4, 5歳児の保育室は、基本的に大きな一部屋です。ただこれは異年齢児保育というわけではありません。子ど

も主体に、課題別にする保育なので、結果的に異年齢になることは多いのですが、はじめに子ども集団があるわけではないのです。どのようなコーナーをゾーンの中に用意するかという時には、動線を考えます。朝、子どもが来て、ここへ来て今日を確認し、自分のおたより帳にシールを貼ります。そのおたより帳をしまいにいきます。そして、開いているゾーンを確認し、自分がやりたいゾーンを選択します。

各ゾーンの意図

ゾーンには、大きく三つの意図に分かれます。一つ目は、人と関わって遊ぶゾーンです。ブロックゾーン、パズルゾーン、伝承遊びゾーン、ごっこゾーンなどです。二つ目は、主に一人で取り組むゾーンです。絵本ゾーン、制作ゾーンなどです。三つめは、運動遊びのゾーンです。子ども達は、何を、どこで、誰とやるのかを自分で決めます。そして、自分で取り出し、自分で片づけるような環境を用意します。それが、「自ら環境に働きかけ、その相互作用により発達する」ことになるのです。

制作ゾーン

制作ゾーンは誰かが作ったモデルを置いてあったり、作りかけを示しておいてあったり、あと、素材がいっぱいあります。ベランダには木工ゾーンがあります。

ごっこゾーン

2歳児までは、ままごとと限定していましたが、この年齢になると、ロールプレイングゾーンとなります。このゾーンでは、子どもからの発想で、必ずしも家庭での調理だけでなく、様々な店舗、様々な職業体験もできるように環境を用意します。同時に様々な衣装も用意され、様々な職業、各国の文化も体験できるようになっています。

ブロックゾーン

立体的なものを作って遊びます。床は、ブロックが壊れた時に大きな音がしないように、ジュータンが敷き詰められています。また、このジュータン内の作りかけのブロックは、1週間保存するため、他の活動と共有しないようにします。

絵本ゾーン

このゾーンはいろいろなときに利用されます。給食前の時間、もらうのに並んでしまいます。それを、子どもたちは絵本を見て調節しています。その時間だけでなく、どんなときでも、時間があれば絵本を読んでいます。お昼寝をしない子、一人でリラックスしたい子、子どもたちは暇があると大人がいてもいなくても、絵本をよく見ます。

ゲーム・パズルゾーン

人と関わって遊ぶようなボードゲームも多く用意されています。個々に並びきれないものは、カタログになっていて、子ども達はそれを見て先生に注文して出してもらいます。

常設ゾーン

子どもたちが日常活動するためにゾーンを設置しますが、そのゾーンには常設のものと期間限定のものがあります。常設なものは、基本的なもので、1年間ほぼ変わりませんが、そこに用意されるものは時期によって変えていきます。それは、子ども達の姿から変える場合と、保育者の意図によって変える場合があります。例えば、制作ゾーンであれば、子ども達を集中させたい時には、曼荼羅めりえなどを多く置き、立体的な造形に取り組みさせたい時には、

箱や廃材などを用意し、協同的な活動を多くしたい時には、大きな箱などを用意したりします。また、それぞれのゾーンの広さも、時期や子ども達の様子によって増減します。

大切なゾーン1

子どもたちがやりたいことが、ゾーンとして用意されていない場合があります。その時には、子ども達が行いたいことを保障するための場所を用意してあげます。そこをフレキシブルゾーンと名付けます。例えば、制作で紙飛行機を折ったので、どこかで飛ばせたいという要望の時に、その欲求を適切に満たすために、その場所を用意します。

大切なゾーン2

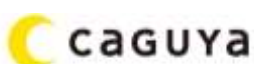
子ども同士でトラブルが起きた時に、自分たちで話し合っ解決する場所を用意します。それが、ピーステーブルです。その場所は、少し離れた場所に用意し、基本的には、子どもどうしで解決し、仲裁は他の子ども達が行います。保育者は、まず、話し合うための子どもの興奮を冷ますことをします。そして、危険がないかを確認しながら、子ども達からは監視されていないと思える距離から見守っています。

大切なゾーン3

子どもたちが自分でやりたいことをやれる場所がゾーンです。しかし、何もしたくないときがあるかもしれません。その時に、何かやることを拒否すると考えるのではなく、「やりたくないことをやる」と考え、その場所を用意します。これもピーステーブルです。

本稿は、2021年5月29日に行われた「第55回保育環境セミナー」の基調講演の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)



〒101-0051

東京都千代田区神田神保町1-1-17 東京堂神保町第三ビルディング8階

Tel:050-1744-8823

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、

QRコードからお願いします。